

〈研究ノート〉

## 亀井勝一郎『転形期の文学』をめぐって

渡 部 治

### 要 約

亀井勝一郎は昭和9年に第一評論集『転形期の文学』を刊行しているが、これは左翼時代の評論として、亀井のなかではその後封印されることになった。亀井自身は昭和12年刊行の『人間教育』を自己再生の出発の書としている。しかし、亀井自身の主体のなかで『転形期の文学』がいかに否定されようとも、そこにはその後の亀井の批評姿勢を形成してゆくための萌芽がみられるのであり、亀井の思考におけるその内的事情を本稿では検討してみようとする。結論から言えば、亀井のめざしたものは主義や公式で糊塗される人間ではなく、あるがままの人間の発見であるといえる。その葛藤が『転形期の文学』のなかにみられることを明らかにする。

### キーワード

意志的人間 体験する情熱 描く情熱 イデオの現実性

### 1 問題の視点一序にかえて

本研究ノートは亀井勝一郎（昭和41年逝去）の第一評論集『転形期の文学』の亀井の思想における意味を探ろうとするものであるが、それは以下の事情によっている。

亀井勝一郎は、昭和40年に刊行された選集第2巻の後記において、昭和12年に刊行された『人間教育』を、自身にとって「最初のまとまった文学論集」であり、「今となれば私の唯一の青春の書」と述べている。また、これに遡って、昭和29年に刊行された角川文庫版『我が精神の遍歴』にみずから付した解説においても、同書について「この本の私の著作中で占める位置について云へば、私の精神の自傳としては二冊目のものである。私は三十歳（昭和十二年）のとき、自分の二十代後半における心の遍歴をもととして、「人間教育」といふ本を書いた。私の處女作であり青春の書であるが」とも述べている。

これらの叙述に照らしても、亀井勝一郎の自著『人間教育』に対する思いいれの深いことが窺われ、事実、同書はその後、版を変えて何度も刊行されたのであるが、しかしこの事情は「事実」に照らして正しくない。そこには、亀井自身によって「封印」された一冊の書物が存在したのである。

昭和9年に刊行された『転形期の文学』(全集第1巻に収録)がそれである。これこそ、亀井の第1評論集と呼べるものであった。しかし、亀井はその再版を許諾しなかったことから推測されるように、亀井は自分の著作歴からもこの書を敢えて封印したのである。『人間教育』に比較して、亀井の内面における位相の差異は大きいものがあると言える。

それはなぜか。亀井を知る人ならばいわずもがなのことであるが、『転形期の文学』が亀井の「左翼時代」の評論集であり、若き日の左翼の時代は亀井自身にとって、苦い悔恨の時節の記憶にほかならなかったからである。亀井はその経験を戦後の『我が精神の遍歴』(昭和23年)のなかにも一章をたてて縷々述べている<sup>1)</sup>。

亀井の死後、講談社から全集が刊行され(昭和46年より刊行開始)、この全集には、保釈直後から昭和35年に至るまでの亀井の日記、それは研究・読書ノートの趣を持ったものであるが、それらとともに、未発表原稿「獄中記」や『転形期の文学』も収録された。これまであまり読まれることのなかったこれらの文献を手にするにより、私たちは、若き日の亀井勝一郎の思索の行程を窺い知ることができるようになったのである<sup>2)</sup>。

論の前提としてこの時期の亀井の行動の軌跡をその社会背景も含めて時系列的に整理してみるならば、亀井は昭和3年4月、治安維持法違反容疑によって検挙され、昭和5年の10月に保釈されるまで、およそ2年半の獄中生活を余儀なくされた。

獄中で咯血した保釈後の亀井は故郷函館に帰り病身を養うとともに、圧倒的な量の読書生活を開始する。その過程は手元のノートに詳細に綴られていった。記述のなかに「研究」という用語がみられるように、亀井の意識のなかでそれは極めて真摯な学びの日々であった。しかし亀井は昭和6年の暮れ、文学と「同志」への志向抑えがたく、東京に戻った。公判において執行猶予の判決を受けたのは昭和8年の12月であった<sup>3)</sup>。

さらに、この前後の社会事情をかえりみるならば、昭和3年3月15日には共産党大弾圧事件「3/15事件」があり、小林多喜二はこの事件の顛末を小説「一九二八年三月十五日」に告発したのである。その小林が築地警察署で特高による拷問によって非業の最期を遂げたのは昭和8年の2月であった。亀井は小林に身近な存在としてこの小林の拷問死を目撃したが、亀井のみならず、小林の拷問死が左翼陣営に与えた影響には極めて大きいものがあつた。それは権力という存在の直接的な恐怖である。

亀井が最終公判の陳述を終えたのは昭和7年の1月22日であった。そして6月に川口浩のすすめで日本プロレタリア作家同盟(ナルプ)に加わり、「プロレタリア文学」に掲載した「創作活動における当面の諸問題」が亀井の最初の論文ということになる。

しかし、前述のように、昭和8年2月20日、小林多喜二が検挙され拷問死を遂げた。これを機に組織は瓦解の速度を速め、翌年2月22日に解散することになるのだが、亀井は8年の3月にナルプ第6回大会で中央常任委員に選出された。6月には「文化集団」が創刊された。その後、亀井の「居場所」はめまぐるしく変わった。9年3月の「文学評論」、4月の第一次「現実」の創刊と続き、この年の9月に『転形期の文学』が刊行された。続いて「コギト」11月号誌上に「日本浪漫派」広告が出され、翌昭和10年「日本浪漫派」が創刊された。『人間教育』の諸論文はここを舞台としたのである。

『転形期の文学』を考察するにあたって、ここに収録された諸論文がこのように昭和7年から9年に書かれたものであるということは重要な要点である。つまりそれは、これら諸論文の執筆が、この時期の権力弾圧と組織瓦解の動きと重ね合わさっているということであり、そのことは翻って亀井の内面に、この状況のなかでの自己の主体性模索の問題を突き付けていたということである。亀井がのちに『人間教育』で、「たとへば小林多喜二は、私にとって依然として一つの事件である」(傍点筆者)と率

直に述べていることは、昭和9年のノートに小林多喜二の死の意味について綿々と書き綴る亀井の心情を想起させるものであるし、おのれの脆弱性に亀井は率直に向き合った。『転形期の文学』の諸論はそのような亀井の内面を反映するものとしても読むべきで、多くの「同志」が地下潜行するか逮捕されてゆく劇的な左翼崩壊の混乱のなかで、新しい旗手にいわば「押し上げられる」かのように登場した亀井が、政治と文学の間でみずからの立ち位置を模索する苦闘の記録である。

## 2 帰郷後のノートの記述

それならば、我々はここで、亀井が故郷、函館に帰郷後に書き始めたノートに改めて注目しなければならない。前述のように、昭和5年の秋に保釈された亀井は獄中で咯血した病身を養うために帰函した。10月17日の日付から始まるそのノートを実見すれば(日本近代文学館所蔵)、それは一寸の隙もないほどに律儀な字体で乱れなく書き綴られている。あたかも修行僧のごとく読書の日々を送る亀井の気迫が行間に窺われる。とりわけ、昭和6年の12月30日から31日の日付で書かれた長い独白の文章は、以後の亀井の精神の根底にありつづけた感性を示すものとして留意される。重要な要点はふたつあって、ひとつは、保釈の際の上申書の内容に触れた部分である<sup>4)</sup>。亀井は以下のように述べていた。

自分は先づ第一に、自分は今後政治活動はしないといふことを書いた。そしてそれは自分の体質や性格からくる自分の弱点である(傍点亀井)。第二に自分は今日も尚革命的戦士に対して最大の尊敬を払ふこと、自己の脱落を飾るために他の同志や党を誹謗するやうな事は絶対にしないといふことを書いた。第三に今後自分はプロレタリア陣営内における主として芸術的哲学的研究に一身を捧げるであらうことを書いた。

これをみれば、亀井の心がいまだなお党に軸足を置いていることがわかる。要するに、党と組織から完全に離脱することなく、ただ芸術的哲学的研究に軸を移すというのである。

重要なのはもうひとつの内容である。上掲の告白に続けて亀井は自己の切ないまでの心情を赤裸々に物語るのである。

自分が政治家として党を守らうとする時、支配階級は自分を釈放しなかった。自分が芸術家として党を守らうとした時、支配階級は自分を釈放した。この事実は二つの悲しみを私に与へた。一つはこの小さな事実によって、日本のプロレタリア芸術運動が支配階級に対して尚一の力にはなっていないといふ悲しみ。他は芸術にたづさはるといふこと、芸術的であること自体が支配階級のおなさにかなふものであるといふ悲しみ。結局、芸術は永久の悲しみであるといふこと。然も長い獄中生活で、自分のほんとの内的欲求—自己欺瞞なき—が、芸術に向かつてゐることを悟った時、かかる自己の自覚過程は、喜びではなく却って深い悲しみであった。(註4に出处同)

3

この文脈に滲み出る「挫折感」「敗北感」をみるべきである。「芸術」(文学)への強い回帰の指向を見せながらも、なお「政治」と「文学」の狭間に身をおいた亀井の挫折感と葛藤がここにはにじみでており、以後の思索と行動はここから出発し、この挫折と葛藤をいかに超克するかという問題にかかわってゆく。

『転形期の文学』の論述はこのような亀井の情念を根柢においてのみ読めるものである。集成された

諸論文はⅠからⅢまでの三つの群によって構成されているのであるが、Ⅰに列挙された諸論文は亀井みずから「第一部には、最近における自分の到達点を系統的に収録した」と述べているように、昭和9年3月から9月までに書かれた論文が順に並べられており、この時点における亀井の思索が集中的に披瀝されているとみることができる点で重要である。煩を厭わずその題目を列記しておく。

○ 転形期の自我 昭和9年3月 「文化集団」

○ 文学における意志的情熱

一、文学は男子一生の仕事に足ると、足らぬと 昭和9年4月 「現実」

二、トルストイ的なもの・バルザック的なもの 昭和9年5月 「現実」

三、政治と文学 昭和9年6月 「現実」

○ 「青年」について 昭和9年7月 「コギト」

○ 芸術的気質としての政治欲 昭和9年8月 「文学界」

○ 政治と文学について 昭和9年9月 「文芸」

○ 批評における鑑賞主義 昭和9年8月 「文化集団」

その冒頭論文、「転形期の自我」は次の書き出しで始まっている<sup>5)</sup>。

あらゆる文学的論争の背後に、私は論ずるものの実体を、即ち、ただひたすらに意志的な人間を  
探し求めようとする激しい欲望に駆られる。知性が興味のままだに様々の理論をもてあそんだ後、人  
間がそれを裏切ってしまうこと屢々であるから、論争の「言葉」に対しては既に濃い不信の感情が  
手伝ふ。(傍点亀井)

文学的論争の核心への亀井の問題意識が最も端的に表出された一段である。『転形期の文学』は、前述のように、昭和初年における左翼への徹底的弾圧の嵐という政治的背景を念頭において読まねばならないが、昭和8年の小林多喜二の拷問死はその象徴であった。これを機にして左翼は雪崩をうって崩壊していった。亀井のこの論文は、そのような左翼崩壊の現場を目撃し、その道筋を背負って書かれたものであるが、この一段において亀井の求めるところはなになのか。亀井は「人間」の箇所にあえて傍点をふっている。亀井が注意を促したいところの「人間」の意味するところはなになのか。

亀井はこの引用の箇所に続いて、現在のリアリズム研究が狭小な心境小説の打破に向けられている現実を指摘しながら、それが「自我の、執拗にして苛酷な再検討」を忘失していることをあげる。抵抗は外部への指向だけであってはならぬ。同じ速度をもって「自分たちの内部に対する反逆の力を」持たねばならない———ということは「弱さも醜さもさらけ出して、私は何をなすべきか」(傍点亀井)ということ  
4 を問うことにほかならない。そういう思いから亀井は「リアリズムの探究」が「空しい自我の粉飾」に終わることを恐れたのである。

こうした文脈のなかに、組織崩壊過程における偽善の顔を窺おうとする亀井の眼差しをみることができ  
るであろう。そうしてみれば「日本の左翼文学のなかに、ただひとつとして、自己の又は階級の出道  
を失ふほどにも混迷にみちた姿を発見できるであろうか」と亀井は問う。「おしまひはいつもハピー・  
エンドではなかったか」。それゆえ「容易に与へられた合理的解決よりは、出道のない深い混迷の方が  
ましだ」という発言も出てくるのである。

また「文学における意志的情熱」の筆頭にあげられた論文「文学は男子一生の仕事とするに足ると、  
足らぬと」(昭和9年4月「現実」)において、亀井は長谷川二葉亭と坪内逍遙をとりあげた。亀井によ



れば、「逍遙は低きに止って完成し、二葉亭は高きに昇らうとして破碎した」人である。その意味は、亀井が二葉亭のなかに、文学的営為に安く自己満足的に自存しなかった姿を認めることなのであるが、それは彼の社会的批判の意図と、しかもそこにおける自分自身の弱さをも告白せしめた（「予が半生の懺悔」）。まさに自己自身と文学の「肯定と否定の危険線上にたえずぐらつく」のが「すぐれたリアリスト」であるというとき、亀井は組織の公式的観念を否定していたのである。「芸術的気質としての政治欲」（昭和9年8月「文学界」）では、「文学の肯定と否定の危機の上にのみ、リアリスト・作家としての存在が保たれている」と述べている。

亀井はこの眼差しをもって次の「トルストイ的なもの・バルザック的なもの」（昭和9年5月「現実」）において、この両者の資質を比較、論じている。亀井によれば、トルストイは「体験する情熱に身を委ねつつ、その社会的生存を第一義的なものとみる作家」であり、バルザックは「描く情熱に身を委ねつつ、それ自体を唯一の社会的生存の仕方とみる作家」である。つまりは文学的営為のなかに自存しえず、社会的現実との葛藤のなかに身を入れ、そこに自己の実存を証明しようとするものと、描く情熱、つまり純粋な文学的営為のなかに自存しうるものとの差であると言えるであろうが、亀井は当然、トルストイに深い共感を寄せるのである。それは紛れもなく、この激動の転形期における自己の喫緊の課題であったからである。

結局、亀井はバルザックの絶大な描写力を評価しつつもトルストイの真摯な葛藤を憧憬するのであった。「私はバルザックの大いさを学びつつもその世界を自己の向上における規範とすることはできない。」亀井の心には「いかに生きるかといふことが圧倒的にのしかかってくる。」それを教えてくれるのはトルストイであった。「近代市民社会の上昇期における描く情熱よりも、私は帝政ロシアにおける体験する情熱を、それと描く情熱との相克を憧憬する。」

亀井には、左翼崩壊のなかで多くの「同志」がその「敗北」と「挫折」を糊塗し、リアリズムという「美名」のもとに自己の内面の醜悪を隠している様が感知されていた。たとえば、前掲の一段を、さらに「文学における意志的情熱」の三に組み込まれた「政治と文学」（昭和9年6月「現実」）の以下の一文に照応してみてもよい。亀井は次のように述べている<sup>6)</sup>。

敗北の精神は私共の外部とそして内部にあるのだ。ある場合には革命的仮面をかぶってさへあるのだ。リアリズムを敗北せしめる反動を生み出した責任を、今日私共は自己の肩にこそ感じなければならぬ。

自己の内心にあえて背を向けることへの警鐘である。そうしてみれば、亀井には当時のプロレタリア・リアリズムと称せられた多くの作物に対して「言葉の上でなく、まことの生活をもって私の背後を衝撃するものがない」という不満の出るのも当然のなりゆきであった。亀井は『転形期の文学』のなかでロシアの作家、ゴーリキーを高く評価しているのであるが、その根拠も、ゴーリキーがただに「階級的人間」を描くのでなく、また、観念や公式からでもなく、「生きた人間自体からその本質を引き出し創造した」からであるとする。そこに「ゴーリキーの大きな芸術的才能」があったのだと述べる。

こうしてみれば、亀井が「人間」という用語に込めた意味が明らかになるであろう。それは観念や理論で糊塗された人間でなく、内心の根底にうづまく感性を抱くところの生身の人間性である。あるいは原始的情動とでもいうべきであろうか、愛や憎悪や、あるいはなにものかになるとうとする原始の意志のようなもの、それこそ人間性の原基をなすものであり、亀井はそれを求めようとした。「政治と文学」の論において、「階級的自覚といったものの以前、云はばその原始状態に、何ものにもわづらはされる

ことなき純粋な良心の鼓動だけをまづ聞かうではないか」と述べているのも想起される。もとよりそれは芸術的志向のなかで涵養されるべきものであった。亀井の文章は晦渋に満ちているが、そのなかから、この原始の人間性をつかみたいという亀井の意志が感ぜられるのである。

左翼崩壊の過程において、亀井には「同志」の多くがこのような生身の人間性から目をそむけ、「理論」に自縄自縛されている様がやりきれなかったのである。「知性が興味のままに様々な理論をもてあそんだ後、人間がそれを裏切ってしまう」というのは、人間の内心を垣間見た亀井の心情を述べたものであった。

このような亀井の意図の現れを『転形期の文学』所収の論文にさらに求めるのは困難でない。私はなおふたつの亀井の言説をひいておこう。亀井がたとえば、昭和9年3月の「文学評論」誌における「作家的良心の所在」と題した論文で、「自己の肉体を離れた仮面の世界への戦ひと、自己の肉体の真っ只中にある仮面の世界への戦ひと、そしてこのやうな二重の戦ひの自覚のうちに、実をいへば私は今日の瞬間における作家的良心の所在をたしかめ、そこに積極性ある主題の構成を期待してゐるわけなのだ」と述べるのも、まさに論題の「作家的良心の所在」がこの左翼崩壊の激動の時期にあってどこにあるべきなのかを自分の言葉で語ったことを示しているであろうし、また続けて、同年5月の同誌の「ありとあらゆる仮面の剥奪」という刺激的な論題のなかで、「僕らは自己のなかに大衆を感じ、大衆のなかに自己の陶冶を意志したのであった。そして僕らはひとつの旗の下に結集し、いま敗退して、その一切の弱点を自分自身に背負はんとしたのである。責任を大衆に負はせる傲慢を僕らの誰もが夢想だにしなかった。僕は弱点をおしかくすることによって、この反動に空々しくうそぶかうとする偽善に堪へなかったまでのことだ」と述べるのも、理論や組織によって自己の人間としての脆弱性を糊塗すまいとする亀井の痛々しいまでの心情がそこに現れているとみるべきであろう。「ありとあらゆる仮面の剥奪」は政治と文学という二つの主題の狭間で苦悩する亀井の精神の振幅が他の論文にも増して現れている論で、次の一節はトルストイについて述べられた一段であるが、亀井の精神の切迫した呼吸がさながら聞こえてくるようである<sup>7)</sup>。

僕はインテリの泣き言を掘りさげるであらう。これも僕に云はせると、ありとあらゆる仮面の剥奪のひとつである。さういふ点で僕はトルストイを非常に偉いと思ってゐる。彼は一步進んで外部の仮面を剥ぐと、同時に自己の内部的生活的仮面をひきむいて、そこに自己と現実とのすさまじい格闘をのぞかせてみせる。「復活」がさうだ。マースロワをとほして、牢獄生活の実際があかるみへ出されると、今度はニエフリュードフの貴族生活の虚偽があらわされてくる。農村の悲惨は、地主である自己の悲惨と交叉して僕らの眼に映じてくる。(中略)一切の社会的醜悪を、その救ひ難いまでにみられるネガティブな現実を、自己の負はねばならぬ共同責任として感じてゐるトルストイは偉大だ。

6

トルストイについては前掲の「トルストイ的なもの・バルザック的なもの」でも言及されていたけれども、亀井がトルストイを評価するのは「体験する情熱」、すなわち行為(政治)から切り離された「描く情熱」のなかに自存することなく、「行為」へと躍りでてゆくこと、そこに問題を常に自己自身の醜悪を暴く試みとしてなすところにあった。亀井は昭和9年4月30日の日記においても、政治と文学の問題を外部的強制の問題でなく自発性の問題としてとらえたいということを述べて「私は自分の生存の息吹を、直接そこに投げ出してゐるやうな評論を書きたい」と書いているのは、主義や公式で教条的に割り切ることのできない人間存在への覚醒を示しているものとかんがえられよう。

そのような亀井の心理はこの稿の最初にもあげたように、「悲しみ」という用語に象徴された「敗北」の心理に根差しているものと言えるだろう。結局、権力の掌の上で弄ばれていたに過ぎなかったのだという挫折感は、一方でおのれの無力感を生むとともに、また一方で、ありのままの人間性を凝視する亀井の感性を呼び起こした。いまだなお左翼の枠のなかで(つまり「行為」としての政治を忘れていない)おのれ居場所を確保しようとしていた亀井であったが、以上の文脈のなかに、私たちは亀井のそのような「人間」への衝動を確かに感じることができると思う。

### 3 林房雄『青年』評をめぐって

註にもあげている武田友寿も触れていることだが、『転形期の文学』における亀井の林房雄評には大きな意味がある。前節にあげた「トルストイ的なもの・バルザック的なもの」に続いて書かれた「政治と文学」(昭和9年6月「現実」)において林房雄がとりあげられているが、翌月、「コギト」に亀井は『「青年」について』と題する林房雄の論を展開した。武田は平野の亀井評、つまり、その生硬な「左翼理論丸出し」の文脈にある程度の同意を示しながら、しかし、そこに、亀井固有のものの見方、感性が現れていると述べるのであるが、それは、特に林の小説『青年』に関連しての亀井の論においてであった。筆者はこの武田の論に共感を示すものであるが、なお次の点について詳述しておきたい。

小説『青年』は、昭和7年出獄後の林房雄がみずから「処女作」と称して書いたもので、初版は昭和9年3月、中央公論社から出版された。維新时期における伊藤博文、高杉晋作、志道聞太(のちの井上薫)ら幕末志士の行動の軌跡を描いたものであるが、昭和13年の林自身の「決定版の跋」を参照すれば、その主題は「日本の再発見であり日本の自覚」であったと述べている。ついで、マルクス主義がすでに過去思想体系に過ぎぬこと、我々はそれから多くのものを学んだが、今はこれを19世紀の思想として書庫の一隅に収めることができるようになったと述べていることをみれば、主人公らの維新时期の行動を描くにもいわゆる社会主義的分析に根柢をおくものとしていないことは明らかである。ここには個人的主観のなかで彩られた登場人物の行動の描写が際立っている<sup>8)</sup>。

亀井は『転形期の文学』のなかで、林のこの『青年』について、数か所において言及しているのであるが、昭和7年10月の評論(「林房雄の近業」)と昭和9年7月の評論(「『青年』について」)の二本の論文が主要なものである。このふたつの論文を比較考証すれば、前者におけるやや批判的な論調は後者においては消えている。まさに武田友寿が、亀井の論の揺れについて論じていることに相応しているであろう。亀井はこの2年の時間のなかで林房雄への傾倒を深めていったことが納得される。

後者の論文で、亀井は小林多喜二らの批判を要約している。

小林によれば、「同志」林は、「事実としての明治維新をホンの少しも描き出してゐない」し、それは「ブルジョア作家、国粋反動作家」の所業と同じで、権力上層部のいきさつを表面的におっているに過ぎない。これが小林の「青年」批判であった。

また河上徹太郎は、主人公の登場人物にたいして「何の下準備もせず、しかもふたりを伴って舞台へ登ると彼らと読者との間をとりもつ労をとらずに、せっせと促して先を急いでゆく。之はそう書くとい見リアリスティックに見えるが、実は甚だロマンチックなやり方」である。これが河上の「青年」批判であった。

これらの批判が指し示す意味は、要するに、「青年」がまったく社会的・歴史的・階級的分析を欠いているということである。同時に引かれている中条百合子の、「青年」は反動そのものであり愛郷塾の演説と同じという物言いもそれをさすのであろう。河上によれば、「作中のこの二青年は此の時代を背



景にして此の外的条件を背負って生まれねばならなかつた」のである。

しかしすでにこのとき、亀井は自己のやむにやまれぬ思いを吐露しなければならなかつた。亀井は以上の批判を引き取って述べる。いったい、「リアリズム」と「ロマンティズム」は別のものではない。むしろロマンティズムをその根底にすえてこそ真のリアリズムが存在する。それは干からびた社会的分析や叙述に終始するものでなく、イデエ（亀井の用語）をつかむものでなければならない。前掲『『青年』について』の論文では、「夢」「夢想」という、はなはだ誤解を招きやすい用語が頻出するが、この語によって亀井が語りたかったものは、表面的分析や描写から脱皮した人間の理想への意志であった。亀井によれば、林房雄の『青年』はその「夢」を遺憾なく語ったのであった。『『青年』について』の論文のなかの次の叙述をみたい。やや長いが全文を引いておかねばならない<sup>9)</sup>。

此の時代に生れて、最も時代の混沌に生き抜いたもののみが、夢想の真の価値をつかまへる。資本論はすばらしい。しかしマルクス自身はシェクスピアやバルザックをこの上なくすばらしがってよんでみた。だいじな点はこゝだ。資本論にひきずられてはだめだ。資本論の著者を感じさせるやうな作品をかかねばだめだとはかつて林の云ったことばである。もし今日マルクスが生きていて「青年」を読んだならばどこに深い感銘を受けるだらうか。おそらくマルクス自身を引きあひに出して、明治維新の分析を試みたところではあるまい。マルクスはそこであくびをする。資本論の著者を決定的に喜ばせるものは、結局、晋作の、聞太の、俊輔の、あの「理想につかまれた」姿ではあるまいか。「世界は一つの事柄に関する夢を長らく懷いてをり、その事柄を現実手に入れるには、唯その夢についての意識を有てばいゝ」とは、左翼ヘーゲリアンたりし若きマルクスの言葉だ。この言葉は、ブラウンではないが、理想につかまれたことのない人にはわからない。ここに高邁なイデエの現実性をつかみうるものこそまことの唯物論者であって、明治維新の唯物史観的な分析をふりまはすものこそ、むしろ安っぽい観念論者であると知れ。(傍点亀井)

亀井はまたこの論文の冒頭で、「批評する精神の以前にまづ感動するといふ素朴な心情を、それをのみ楽しんでいささかの不安を与へない作品、林房雄の「青年」こそ稀なるもののひとつであらう。これを読み私は、「青年」につかまれてひたすらな喜びを味ふことが出来た」(傍点亀井)とも述べている。

しかし、こうなれば、亀井の物言いは、左翼の文学観、芸術観に明確な疑義を呈しているとすら言えるのであって、地下に潜行した小林多喜二や宮本顕治らによって、「右翼日和見主義の本質を隠蔽する調停派的役割」を果たしていると批判されるのも無理からぬところではあった。しかし、すでに獄中であって、自分の本来の志向に目覚めた亀井は、既成の理論や外的描写でなく、それらの根底にある人間そのものをつかみたいという欲求を抑えることはできなかった。これは「理論」の整合性を越えた「混沌」への欲求であると言える。のちに亀井の人間観、歴史観の根底をなす欲求であるが、その萌芽がここに見られると言えるであろう。

#### 4 総括と『人間教育』への関連

以上の論述によって、『転形期の文学』が亀井勝一郎本来の感性をそこに滲ませている論集であることが明らかにされた。

こうしてみれば、『転形期の文学』から『人間教育』への論旨と方向に絶対的な断絶があったものとは言えないという考えに筆者は想到する。この両著の差異はなにより亀井の主観内部のこだわりを指し



示している。繰り返せば、亀井が『転形期の文学』を自己の著作歴の奥に封印した最大の理由は、自己の精神的主体を左翼の陣営内になおおいていたというそのこだわりによる。事実、その点からみるならば、この論集のなかの論文は、至る所で亀井本来の資性の芽をのぞかせながらも、左翼理論の枠のなかで自分の位置をとらえようとする亀井のこだわりを見せている。先に武田友寿の論を追った際にも指摘した林房雄評のなかにもそのことは現れていたのである。

そしてそのことは明らかな内的矛盾であった。一方、『人間教育』は左翼崩壊ののちの「日本浪漫派」(昭和10年3月創刊)時代に書かれたものがほとんどであるが、この書に貫かれるものは、左翼の呪縛から自身を解き放ち、新しい自己に生まれ変わりたいという亀井みずからの「再生」への切なる祈念であった。然り、この再生への祈念こそ『人間教育』を『転形期の文学』から区別する最大の内的(あるいは実存的と言ってもよい)理由である。

ここで『人間教育』について、さらに論を補っておきたいのであるが、繰り返すように、『人間教育』に集約された諸論文は、昭和10年以降、「日本浪漫派」誌に掲載されたものであるが、亀井の立ち位置は明らかに自己の再生という軸に向けられていた。左翼崩壊のなかで自己の再生をいかに果たすか。それは「生まれ変わる」という表現が切実にあてはまるほどに亀井にとって重要な内的主題となった。亀井の文脈を追いながらその葛藤の軌跡を確認しよう。

序章「精神の危機と再生について」は亀井の問題意識を提起した密度の高い論である。その冒頭に亀井は書き綴る。「生涯のある刹那に変転を迫られたならば、その時人は何によって生きるか? 何ものに信頼するか? 彼みずからが何に生成するか? これはわが同時代人のすべての胸にしみこんでゐる重大問題であらう。」このように述べる亀井の心理の裏には次のような思いがあった。「内省が自己を苦しめる。革命的政治行動を完全に戒められ、自らもそれから遠ざかった後、たゞ痛恨と憧憬とが主我的瞑想の内容になってきた。私の心は空しいまゝに廻転した。私は何かを探るために身を動かさねばならなかった。その時、私はまづ殉教者の心理を—政治的理想のために殉ずるものの心を探らうとしたのである。あの崇高にまでみえた魅力の実体を。しかも集団のたゞ中に至って自我の苦悩を洩らすのがときものの心理を。」(傍点亀井)そのとき、亀井の正面の主題となったのは、「政治犯人」としてのドストエフスキーの苦悩の軌跡であり、当時多くの青年に浸透した『悲劇の哲学』のシェストフの論であった。シェストフについて亀井は言っている。「シェストフが私の興味をひくのは、背教者とか異端者とか呼ばれてゐる人間の心理を、彼が熱烈に愛し求めてゐるからである。神、善、あるひは人類の未来を幸福にすると約束した学説から、完全に身をそむけた場合、人はどのような心理を自己の内部に形成するだろうか? 彼は何によって自己の生を肯定しようとするだろうか?」これは言うまでもなく、そのまま自己の内心に問われた切実な問いでもあった。

『人間教育』に至って亀井の文章からは左翼的、党派的な翳りは消え、人間内奥の問題を問おうとする切実な内的迫力が増してくるのである。詳論はこの稿の目的ではないが、結局、亀井はシェストフのように、人間内奥の偽善を告発するだけのところに安住することはできなかった。「シェストフを読み終わった後、私はこの奇異な運命にどう対すべきかを考へないわけにはいかなかった。自己を空しくして根かぎり奉仕したひとつの社会的理想が崩壊したとき、さういふはかなさが自虐のかたちをとり、最早何びともそれを信じえず、すべての理想や希望や善に対した復讐鬼としてのみあらはれざるをえなかった自我—私は彼に拠ってそれを確認した。そして結末は、かかる喪失感の赴くところ畢竟自決あるひは狂気以外にないこと、にも拘らず生きのびてゐるシェストフを、ユダの垂流とみることによって、私自身は彼から離れたいと願った。」筆者はここに亀井の痛切な祈念のごとき熱を感じる。亀井にとってゲーテへの回帰はすぐそこに見えていたのである。

なお『人間教育』のなかで武者小路実篤について言及されている点も見逃してはならない。武者小路への言及は、『転形期の文学』との精神の位相の差異をみる上でもきわめて重要であるからである。

『人間教育』第二章「古典美への誘惑者」のなかの「ローマにおける武者小路実篤」の段がそれである。昭和初年代のマルクス主義運動の高揚のなかで武者小路文学は疎外されていた。武者小路はその激動を避けるかのように渡欧し、そこから発信されたのがヨーロッパの芸術に触れた旅行記である。亀井はこの時期に、武者小路の旅行記に溢れるその精神に深く打たれた。美と芸術の本質を自己の偽らぬ眼差しでまっすぐにみる姿勢を高く評価した。亀井はそこにゲーテのイタリア紀行を重ね合わせ、美と再生への自己の思いを紡いだのである。ここには『転形期の文学』の諸論のなかでその萌芽を見せていた文学と芸術への志向が純粋なかたちをもって発露されている。亀井は以下のように述べている<sup>10)</sup>。

いま武者小路氏の旅行記をよみつゝ、私は同じ運命をこの作家に想ひ感慨無量である。武者小路氏はゲエテとひとしい高さをもって北欧から南欧へと旅してゐる。決して誇張ではない。ゲエテの「イタリア紀行」と氏の旅行記とを比較してみよ。互いに見知らぬ二つの魂は相抱いて「再生の想ひ」を語ってゐる。「部分的に熟知してゐたものを眼のあたり全体としてながめる時、そこには新しい生活が始まるものだ。青春時代のすべての夢はいま眼の前に生きてゐる。」ゲエテはかく語り、武者小路氏もまたかくしるす。しかも日本の詩人として我々の同時代人であり、更に一層下降しつゝある現代文化のさなかにゐる日、武者小路氏の意義はゲエテ以上に大きい。我々にとって大きい慰めであり、力であり、感謝である。

武者小路文学の大いなる呼吸を亀井は自己のうちに吸収し、以後、武者小路と亀井の間には敬愛と親愛に満ちた交流が続いた。そして、武者小路文学への亀井の評価と敬愛は一貫して変わらないものがあった。この時代にあつて、亀井勝一郎ほど、武者小路の文学と思想を明快に理解し評価した批評家を筆者はほかに知らない。混迷の時代からの切なる再生の指針を亀井はゲーテに、そして武者小路文学のうちに求めたのである。

(現在、函館市元町の旧亀井邸の向かいに建てられている「亀井勝一郎生誕之地」の碑の揮毫は武者小路実篤によるものである)

こうしてみれば、『人間教育』における自己再生への祈念が明らかになるであろう。しかし、その萌芽は『転形期の文学』のうちに見られることを再度確認しておきたい。それらの諸論は亀井が真摯に人間と文学を論じようとした批評家としての最初の記念碑であつたのであり、日本のプロレタリア文学評論史の上においても異色の個性的な足跡を残したものであると言える。

10 伊藤整は『近代日本の文学史』のなかで、大正末年から昭和初年における共産主義運動が当時の青年に与えた影響の本質を、「既成秩序への反抗の喜び」「正義に基づく秘密政治運動を行うヒロイズムの満足感」をあげている<sup>11)</sup>。要するにその運動の本質は徹底的社会革命をめざす本来の意味での共産主義運動ではない。それゆえそこには本質的な脆弱性が常に伴っていたという。それは大方首肯できるにしても、その脆弱性を直視しそこから誠実な人間研究へと転じていったところに類まれな亀井勝一郎の批評の礎石が形成されたことを読者は忘れてはならない。

筆者はすでに「国際経営文化・研究」Vol.21に論文「亀井勝一郎の思想形成」を発表しており、また、亀井勝一郎の主要著作を辿りながら、その思想の道筋を辿った『亀井勝一郎研究序説』(全訂版)を私家版として出したことがあった。(2016)それらの論において、亀井勝一郎の思想が現代を広く俯

瞰する文明批評にその本質を持つものであることを明らかにした。しかし、その際に『転形期の文学』については十分に論じえなかった。本稿はその叙述を補完する性格を持つものである。

## 註

亀井勝一郎全集は講談社より昭和46年3月より刊行が始められ、昭和50年2月に完結した。全24巻。本稿引用の原文もこの全集版によっている。なお原文引用箇所については、煩瑣になるのを避けるため本文叙述のなかにあげたものについては明示しなかった。

なお補論として以下のことを付け加えておきたい。

亀井の初期評論時代の経過については、同時代者としての立場から平野謙が全集月報8号(1971/12/20 第1巻解説)、及び15号(1972/8/20 第2巻解説)に詳論している。印象的なのは、平野が『人間教育』への移行について、「そういう亀井勝一郎の「信念再生の物語」が、二度と私の切実な関心を惹かなくなるのは是非もない」と最後に言い添えていることである。平野の立場なら当然のこととあってよい。しかし亀井の読者ならば、まさにここからが正念場である。武田友寿も亀井について多く論じているが、武田の論が筆者の共感を呼ぶのは、武田が亀井の初期評論やノートの記述をより亀井の内面的葛藤の記録として読もうとしているからで、武田はユダの苦悩に自分の苦悩を重ね合わせる亀井について、「そこに見ることのできるものは、「転向」という政治的・外表的行為の内化、つまり実存的深化である。亀井が真に「転向者」として生きることを自覚したのはこのときからである。小林多喜二の悲惨な死を目撃した日から二年半を経ていた。批評家・亀井勝一郎の而立の旅立ちの日がここにある。ここに思いをいたすのでなければ、亀井勝一郎の「転向」を追尋する文学的意味はない。」(傍点武田)と述べている。(武田友寿「亀井勝一郎の転向」。清泉女子大学紀要1981/12)

- 1) 『我が精神の遍歴』は『人間教育』とともに全集第6巻に所収。第1章「罪の意識」第2章「戦争と自己」第3章「信と美の相克」によって構成。第1章「罪の意識」のうちに「無神論、政治的動物の記録」「幽閉記」の節があり、自己の青春の回顧が綴られる。
- 2) 全集第6巻『我が精神の遍歴』第1章の最後に、書簡のかたちで次のように綴られているのはこの時期の亀井の内面をよく窺わせるものである。「懐かしき友よ、僕は出獄後、恬然として家郷へ帰り、しばらく病を養った後、居たたまれずに再び家郷を去り、裁判の決定するまでのほゞ五年間を「左翼的」な波濤のうちに彷徨しつつけてゐたのである。」(傍点筆者)なおこの「裁判の決定するまでのほゞ五年間」の記述であるが、それならば、執行猶予の判決を得たのは昭和10年ということになる。しかし亀井がその判決を得たのは昭和8年12月である。そのあたりの記憶の齟齬を平野謙も前掲解説のなかで指摘しているが、単純な記憶の齟齬なのか意図的な齟齬なのかは不明である。しかし、昭和10年は日本浪漫派旗揚げの時期と一致するから、亀井のなかでそのような操作があったのかも知れない。
- 3) 全集第1巻に昭和5年と6年の「ノート」を、2巻に昭和7年から昭和19年までの「ノート」を、21巻には「日記」の表題で、昭和20年から昭和35年までのものをおさめる。全体として研究的な詳細な論から備忘録的な日常の記録へと推移している。
- 4) 全集第1巻 647頁以下。
- 5) 全集第1巻 11頁
- 6) 全集第1巻 54頁
- 7) 全集第1巻 186頁
- 8) 林房雄『青年』創元社 昭和19年2版 424頁
- 9) 全集第1巻 59頁
- 10) 全集第6巻 99頁

亀井勝一郎の交友のなかでも武者小路実篤とのそれは特筆に値する。亀井は多くの武者小路文学、作品の解説、批評を残しているが(全集補巻1参照)、それらをみてゆくことで、亀井勝一郎の思想的・文学的特質の反照をそこにみることも期待される。加えて述べれば、太宰治との交流も亀井には忘れがたいもの

であった。そこで、武者小路と太宰という、極めて対照的な文学的資質をみせるこの二者に亀井が共感を寄せ、人間的交流を結んでいたということは筆者にとって長い間の関心事であったが、それは筆者の個人的関心を越えて、この二者への亀井の見方のなかに、亀井自らの文学的・思想的特質が反照されているのではないかという問題が展望できる。それは後日に期する筆者の課題である。

- 11) 伊藤整『近代日本の文学史』伊藤整全集(新潮社 1973 年)第 21 巻 533 頁。伊藤は同書で「転向文学」の項を設けて次のように述べている。「(亀井勝一郎は) 自己のあらゆる仮面をはぎとって真実に直面しようという意図のもとに評論集「転形期の文学」を書いた。この書物が出版されたとき、窪川鶴次郎、徳永直、森山啓は、亀井の立場を、革命思想以前の個人主義にほかならぬと批判した。しかし亀井は、より純粹なものを求める衝動から、しだいに宗教の世界と古典文学の世界にはいつて行った。」(同書 534 頁)『転形期の文学』前後の事情を簡潔に叙述しているだろう。